

一般演題（ポスター）

P-001 ~ P-106

P-001

運転免許センター内献血ルームにおける地域連携による献血者確保

埼玉県赤十字血液センター

吉田理香、梅津洋一、太田 勉、小林羊孝、
富澤春美、鈴木有為子、田村真由美、
武井浩充、岡田辰一、中川晃一郎

【はじめに】当ルームは平成8年に主に運転免許センターの来場者を対象に設置された。しかし、平成20年には運転免許の更新が県内全ての警察署でも可能となり、免許センターへの来場者は減少、それに伴い献血者も減少を続け、平成28年度には一日平均確保人数は43.5人となった。献血者の減少を食い止め、献血者確保向上のために実施した取り組みについて報告する。

【取り組み】一日平均50人の献血者確保目標とし、献血を目的とした来所者を増加させるため、「鴻巣献血ルームサポータークラブ」という名のもとに近隣地域の献血者増加とリピート率向上に努めることとした。(1)鴻巣市を含む近隣9市町村の献血者を対象に、スタンプ2個ごと(400mL献血でスタンプ1個)に記念品を差し上げる「鴻巣献血ルームサポータクラブスタンプカード」を配布し、リピート率向上に努めた。(2)同献血者を対象に、メールやハガキでの協力依頼や日ごろのお礼を含め年賀状等の送付を行い、再来を促した。(3)進捗状況グラフを毎朝礼時に周知し、職員一丸となり業務にあたった。
【結果】近隣9市町村の献血者割合は平成28年度38.1%から、令和2年度48.5%に上昇、延べ献血者数は4,866人から7,168人に増加した。年間献血3回は384人増(228.0%)、2回は491人増(186.6%)となった。一日平均確保人数は平成28年度43.5人から、令和2年度50.3人となり、1日平均50人の献血者確保目標を達成した。

【考察】免許センター敷地内に立地する献血ルームにおいても地域の献血者を増やし、リピート率を向上させることは有効である。また令和2年度、新型コロナウィルスの影響で免許センターは4/16から5/31まで一部業務を休止しており、その間来場者は激減したが、当ルームは地域の献血者に支えられ受け入れを継続することができた。今後も地域の献血者へホスピタリティをもって接し、より一層献血のご協力をいただけるよう、この取り組みを継続していきたい。

P-002

成分献血希望者の400mL献血への変更依頼について

岡山県赤十字血液センター

吉岡真理、岩間梨乃、中村仁美、吉本典彦、
古長加代子、嘉本俊子、小島麻美、
芦田久美子、土居明子、松本喜久代、
古谷野智、坪田 徹、池田和眞

【目的】固定施設における400mL献血者確保対策として実施した**【方法】**成分献血を希望されている献血者に対して、受付担当者が成分献血の実施ができない場合に400mL献血への変更を推進し、変更が可能であると申し出があった献血者の「受付・検診・採血連絡票」に「400可」と記載した。また、採血前検査担当者が「400可」の記載を確認し、乳び又は血管が細めな方に対して400mL献血を依頼した。集計方法としては、献血受付状況照会画面にて、並び替え欄の番号を「6：希望献血」として並び替えを行い、受付時の希望献血が成分献血(PPP又はPC+PPP)で、実際の採血種類が400mL献血の献血者を集計した。**【結果】**当出張所における2019年度の400mL献血者数は8,956人、2020年度は9,884人となり、対前年比110.4%の増加がみられた。増加の要因としては、電話・メール・ハガキ等による依頼の効果も考えられたが、今回の調査の結果から、成分献血受付で400mL献血に変更した人数が2019年度の427人に對し、2020年度は1,116人と対前年比261.4%増加しており400mL献血者確保に大きく寄与していることがわかった。**【考察】**固定施設での400mL献血確保対策として、本来であれば乳びや血細などで不採血となる予定であった献血者に対して、受付担当職員や採血前検査担当者が声掛けを行うことによって400mL献血への変更依頼が期待できる結果となった。今後も、出張所全スタッフの協力により、成分献血希望の献血者に積極的に400mL献血へ変更の声掛けを行うことで血液の安定的な供給につながると考える。

P-003

2020年度における献血ルームでの献血者確保対策：コロナ禍と隣接大型商業施設閉店の逆境下での取り組み

徳島県赤十字血液センター

齋藤 稔、成瀬貴彦、藤倉倫代、沢野真理子、板東志昌、新谷保実

【はじめに】献血ルームアミコはJR徳島駅前の商業・多目的ビル3階にあるベッド数10の固定施設である。2020年2月下旬より新型コロナウイルス感染症の拡大とともに、イベントの中止や外出自粛等の影響で献血者が全国的に減少し始めた。徳島県でも若年層を対象に毎年約600人に献血協力いただいた大規模イベントが中止となり、さらに献血ルーム同ビル内に入店していた大型商業施設が2020年8月末で閉店し、献血ルーム周辺の人出は激減した。**【方法】**このような逆境の中で、2020年度は以下の対策を行った。1)献血者確保対策：最終献血から1年以上経過している献血者に依頼ハガキを1,200通送付。協力団体への献血依頼、Web会員への勧誘と予約推進、電話依頼（月平均750件、応諾率10%）を強化した。さらに、地元報道機関等への取材依頼を増やし、マスメディアへの出演により献血への呼びかけを積極的に発信した。2) ウィズ・コロナ時代のキャンペーン：新型コロナウイルスの感染対策として、待合室が密にならないよう、これまで土日に開催していた献血協力団体の協賛キャンペーンを、特に献血者の確保が難しい平日に開催した。また、支援学校の生徒が栽培した季節の花をプレゼントするキャンペーンでは、人との接触を避けるため、街頭での呼びかけや献血者に生徒から花を手渡す活動を中止したが、献血者と生徒の想いが通い合えるよう、献血者から生徒に感謝の気持ちを記入したカードを集め作成したメッセージボードを支援学校に贈るなどの工夫をこらした。**【結果】**2020年度の総献血者数は15,869人（前年度比106%）となり、逆境下の中ではあったが献血者数を増加させることができた。**【考察】**コロナ禍での献血者減少は全国共通ではあるが、隣接商業施設の閉店・人流減少にもかかわらず、感染対策や地道な個別依頼・広報活動により献血者数の減少を回避できた。逆境はなお続いており、これらの対策・成果の継続性が今後の課題である。

P-004

全血献血者に対する『ダブル献血』の推進～看護師の立場から～

千葉県赤十字血液センター

飯沼以菜子、加藤典子、藤井里香、吉村聖子、三宅亜希子、鈴木明日香、三上佳子、小池明日香、齊藤弘行、ペティートタク、細井俊彦、井原隆博、秋山眞由美、金子健一、小野由理子、脇田 久

【はじめに】

コロナ禍の影響により当センターでは特に移動採血における全血の確保に苦慮し固定施設では成分より全血採血を優先せざるを得なく成分献血の安定的確保が課題であった。そこで令和2年度より千葉出張所（モノレールちば駅献血ルーム）では看護師が中心となり400mL献血者を減ずることなく新規成分献血者の確保を目指す『ダブル献血』を推進、現在県内全固定施設でこの活動を展開中でありその結果を報告する。

【方法】

1. 血管が良好で成分献血の履歴又は直近履歴がない400mL献血者を中心に採血担当看護師が「成分献血」について専用のパンフレットを用いて説明。
2. 「成分献血」の協力同意が得られた献血者のファイルには説明に用いたパンフレットを挿入し受付接遇担当者に伝達。
3. 接遇担当者は次回「400mL献血」の期日前に「成分献血」が可能であることを説明し協力を依頼。
4. 令和3年度からは登録課より対象者に対し成分献血可能日約2週間前にメールで協力を要請。
5. 定期的に対象者の動向を調査し固定施設共有の進捗管理表に結果を記載し情報を共有化。

【結果】

令和2年度に成分献血の同意が得られた400mL献血者は516名で、そのうち89名（男69、女20）(17.2%)が次回「400mL献血」の期日前に「成分献血」を実施し、このうち32名（35.9%）は初めての「成分献血」者であった。6か月以内では98名、のべ184名（1回42、2回26、3回以上30）超の協力が得られた。

【考察・結語】

看護師が自ら主体とならなければ出来ない改善であることを意識して推進したこと、受付スタッフや登録課と連携しチーム全体で継続的に取り組んだこと、対象者の動向を調査し進捗管理を行い、可視化して情報共有を図ったことなどが良好な結果に繋がったと思われる。成分献血協力者のうち初回成分献血者が1/3強と相当数みられたことを踏まえ新たな工夫や改善を加えながら千葉県内全ての固定施設で『ダブル献血』の推進活動を継続中である。

P-005

日赤プラザ献血ルームにおける若年層献血者確保に向けた近隣大学との取り組み

熊本県赤十字血液センター

田中咲紀、今村勇太、川邊敬子、益田光梨、仁田尾正高、岩根一己、早川和男、菊川眞也、米村雄士

【背景と目的】熊本市郊外にある日赤プラザ献血ルームは、献血者の77%が40代以上となっている。将来の輸血医療を支えるために若年層献血者の確保が喫緊の課題であることから、同ルーム近くにある熊本県立大学と共に取り組みを行った。**【方法】**1) 同大学が行う地域連携型卒業研究制度（地域企業・地域社会からテーマを募集し、地域が抱える問題に、学生が卒業研究として企業団体と共同で取り組むもの）に応募し、「若者が行きたい魅力ある献血ルームへ」をテーマに学生を対象に共同研究に取り組んだ。同研究では、まず、学内で献血に対する意識調査を実施（回答581名）。その結果、献血を身边に感じていないこと、重要性は認識しているものの他人事と捉えている傾向にあることがわかった。そこで、協力学生と話し合い、献血への親近感を持つもらうため、学生が日常的に使用するクリアファイルを協力学生によるデザインで作成。さらに、献血に関する知識獲得の機会創出を目的に学生向けの情報に特化した電子書籍を作成し、同ファイルに2次元バーコードを掲載する形で配布した。2) 移動採血車による学内献血に代わり同ルームへの誘導を図ることを目的に、同大学の学生を対象としたキャンペーンを実施（令和2年12月と翌年4月、各一週間）。**【結果】**1) 同ファイル550部配布した時点で評価アンケートを実施（回答128名）。「クリアファイルを利用することで献血に関して考える機会は増えるか？」に対し73%が肯定的な回答であり、献血のきっかけづくりとしての有用性を確認できた。2) キャンペーン期間中の来所者数85名。同ファイルを見たという声も頂いた。**【考察】**共同研究を通して学生ならではの新しい視点を得ることができ、効果的な広報媒体を作成できた。また、並行してキャンペーンを行うことで協力者は確実に増加した。今後も、同大学の協力を得ながら若年層協力者の増加を目指して取り組みを継続したい。

P-006

白血病闘病体験談の動画活用について

静岡県赤十字血液センター

鈴木梨緒、皆木暢之、堅田剛充、竹内規泰、北村淳也、村上優二、藤村優二、加藤和彦、鶴田憲一

【はじめに】若年層献血の推進にあたり、静岡県西部在住の血液疾患を有する20代男性の闘病体験について、ご本人協力のもとインタビュー形式でビデオに収めた。その動画を浜松事業所管内における高等学校での献血セミナーで活用したところ、アンケート結果から若年層への献血の重要性の訴求効果が得られたので紹介する。**【方法】**浜松駅前出張所へよく献血をお越しいただく方から、ご子息が高校生で白血病に罹患し、輸血治療を経て治癒された話を伺い、ご子息に輸血経験者として職員対象で闘病体験を話していくだけないか相談したところ、快諾いただいた。患者さんの生の声を聞く貴重な機会であるため、話をする様子をビデオに収めて編集し、ご家族と本人の了承のもと、職員向けだけでなく、高等学校における献血セミナーで活用した。撮影は浜松事業所会議室で実施し、事前の台本は用意せず、自然に話をしていたいきで当時の心情がありのままに表現され、視聴者の心に響く動画となっている。このビデオを活用しアンケート調査を行い解析した。**【結果】**この映像を活用した高等学校での献血セミナーに、2019年度7月から6校721名、2020年度は1校180名の参加が得られた。コロナ禍でセミナー実施校が減少し、過去との比較は難しいが、852名の生徒を対象にアンケートを実施し、映像の内容を「よかったです」と回答した人が690人（80%）と好評であり、また、「献血に協力したい」と回答したのは657人（77%）という結果が得られた。また、「闘病を経験した方の話は身近に感じた」「輸血で助かる例を知り献血の大しさを感じた」など前向きな意見を得た。**【考察】**献血された血液が実際に輸血用血液として使用される様子や、自分たちに近い世代でも輸血が必要な人がいるということが、献血の重要性を訴求するのに効果的であったと考えられる。今後、幅広い層の方に動画を用いて献血の必要性を感じていただけるよう訴えていきたい。

P-007

e スポーツを利用した献血広報活動 コロナ禍における新たな献血推進の試み

新潟県赤十字血液センター

江部宏生、桑原大拓、市川佑果、鳥羽大輔、
大島直行、牧野剛久、小林智子、平下 正、
布施一郎

【目的】コロナウイルス感染症の拡大が続き、今までのような献血講演会やセミナーの実施がままならくなっていた。このまま外出自粛ムードが続けば、献血者の減少が危惧されたため、新たな広報展開と情報発信が必要であった。**【方法】**そこで、屋内でゲームを楽しむ人が増えると想定し、地元テレビ局が主催する「e スポーツオンライン大会」にてスペシャルサポーターとして当センターが協賛した。15秒の献血PR動画を作成し、地元テレビ局主催の YouTube 「e スポーツオンライン大会」にて新たな層をターゲットに11月と1月の2回配信した。番組内では、パーソナリティーとゲストのプロゲーマーが献血協力を呼び掛けた。併せて、番組を観て献血していただいた方には記念品を進呈するキャンペーンを行った。当センターでは番組配信の案内チラシを作成し、県内の専門学校に配布したほか、当センターホームページでも大会の事前告知、およびラブラッド会員へメール配信した。**【結果】**今回の企画において、広告代理店によるリサーチを行った。第1回の番組閲覧件数は4ヶ月間で1,083回であったが、第2回は2ヶ月間で1,202回にのぼり、1ヶ月当たりで約2.2倍に伸びた。そのうち、番組を閲覧し献血に訪れた方は期間中44名であった。番組配信当日の視聴者属性はすべて10代から30代の若年層であった。視聴アクセスの方法としては、YouTube 内で自発的に検索した人たちが25.5%を占めた。**【考察】**コロナ禍において、実際に2,000人以上の聴衆を集め講演やセミナーを開催することは極めて困難である。今回 e スポーツを活用することで、新たな層に献血をアピールできた。44名の献血者を獲得することができたが、献血率は1.9%にすぎず費用対効果は決して高いとは言えなかった。今後は新たな情報発信の手段として e スポーツのさらなる効果的な活用方法を探って行きたい。

P-008

地元アイドルグループ「Yamakatsu」とコロナ禍における献血推進コラボ活動

山口県赤十字血液センター

吉屋友加里、藏増拓朗、二井真帆、大田洋介、
岩川弘幸、村上文一、横畠和紀

【はじめに】やまぐち献血ルーム For you では、地元アイドルグループ Yamakatsu (旧グループ名「山口活性学園」) を起用し、その献血推進活動について、SNS やラジオなどの媒体で周知、献血への興味を促し、効果的に献血行動へ誘導する献血推進コラボ活動を実施した。

【方法】

企画1 献血アンバサダー活動（2020年7月20日～8月14日）

献血セミナーを受講しルーム職員と意見交換を行ったメンバーに、献血アンバサダーを委嘱。活動内容は以下のとおり。

- ・新曲「compass」をキャンペーンソングとしてラジオやライブで披露
- ・5人のメンバーが日替わりでラジオ出演し献血を PR
- ・SNS で「#ヤマカツケンケツ」を用い全国のファン、ラジオリスナー参加型のイベントを実施
- ・献血ルームに衣装や DVD を展示

企画2 バレンタイン献血キャンペーン（2021年2月1日～14日）

若年層の共感を狙って市内専門学校の協力を得、メンバー考案のチョコレートをパーティシエ科の学生が作成、期間中の献血者にプレゼント。報道機関3社が試作から製作までの過程を放送。

企画3 メンバーと献血ルーム職員がFM ラジオの特別番組を企画・制作。生放送でキャンペーン活動の思い出話や「チョコレート」をテーマに想いを伝えた。

【結果】

・献血ルーム For you での協力者数

企画1 813名（前年同時期比139.0%）増加率（10代～30代 116.5% 40～60代 147.8%）

企画2 476名（前年同時期比134.7%）増加率（10代～30代 141.2% 40～60代 132.4%）

・ファン対象のアンケートでは、81%の方が献血ルームに初めて来所

【考察】コロナ禍であっても、地元アイドルとのコラボ活動により期間中の献血者が増加した。また、おうち時間の増加により利用者が増えたであろう SNS やラジオの活用も効果的であった。全世代の協力者が増えたが企画2では専門学校とコラボすることで、更なる若年層強化に繋がった。今後もコロナ禍において効果的な企画を行っていきたい。

P-009

若年層向け献血推進動画の作成及び SNS での展開について
～2分でわかる！献血の流れ～

埼玉県赤十字血液センター¹⁾、
埼玉県学生献血推進連盟「赤い絆」²⁾

千賀嘉子¹⁾、飯田真理子¹⁾、小泉陽平¹⁾、
鈴木 剛¹⁾、武井浩充¹⁾、中川晃一郎¹⁾、
麦倉綾華²⁾、新澤なつみ²⁾

P-010

複数回献血者数増加対策としての「もう1回献血」のお願いについて

秋田県赤十字血液センター

齋藤絵梨子、堀井和人、加藤晴夫、若林銳子、
齋藤貴仁、高橋 聰、國井 修、阿部 真、
長井 剛、面川 進

【はじめに】令和2年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、埼玉県学生献血推進連盟（以下学連という）では所属大学の学外での活動制限もあり、例年のような活動ができない状況にあった。学生間においても、対面での活動が困難な状況となっていた。そこで、若年層献血者の増加や学連への新規加盟者の勧誘活動を目的に、若者が目にしやすい形での献血推進動画の作成を学連加入者とともに行ったので報告する。

【方法】月に1度の学連オンライン会議で“SNS ができる広報活動”をテーマに動画の作成を行うことが確認され、動画の流れや内容について話し合われた。大学より活動の許可の得られた学生と共に、川越クレアモール献血ルームで動画を撮影した。撮影機材として、スマートフォン、編集はパソコンで行った。

【結果】SNS 媒体（Twitter・Instagram・YouTube）で動画の配信をおこなった結果、多くの反響が得られた。1つのSNS 媒体に載せることで、他の媒体にリンクが可能となり、より多くの方に視聴いただける要因となった。また、動画をQRコード化し紙媒体で配布することにより、献血の流れを2分で説明できる推進材料として有意義な資料となった。新型コロナウイルスによる自粛期間の中、若者が抱いている献血に対する不安や恐怖を払拭し、親しみをもってもらうために、ポップな曲調での動画作成を心懸けた。結果、若者に限らず全世代の献血初回者への推進動画として好評で、SNS ができる広報活動を具現化した動画となった。また、他県の中学生を対象としたセミナーでも使用された。

【考察】要点を抑えた2分という短い動画にすることで最後まで気軽に再生することができる。周知方法としては、SNS の他に埼玉新聞社へプレスリリースをするなど周知に努めたが献血ルームなど各施設への周知が不十分であった。今後は献血セミナーなどでの活用や新規渉外活動での説明資料として活用する。

【目的】人口減少、少子高齢化・過疎が進展する地域にとって、複数回献血の推進は切実な課題である。令和元年度秋田県では献血者38,426人、実献血者21,782人、献血可能年齢人口に対する献血率は6.5%、1回のみの献血協力者は14,271人(65.5%)であった。さらなる複数回の献血協力を得ることで、必要とする献血者数を確保できると考え、年1回の献血者に再度の献血を依頼したので、その手法と成績について報告する。

【対象と方法】令和2年4月から10月までの献血者(24,732人)で献血1回のみの秋田市在住、固定施設での献血協力者で依頼応諾「否」を除き次回献血可能日を令和3年2月15日以降に設定し、対象となった献血者（男544・女511）に「もう1回献血」の依頼文を郵送した。職種は会社員が521人49.4%であった。依頼文に加え令和元年度年1回のみの献血者割合等を掲載したチラシと献血Web会員サービス「ラブラッド」への誘導チラシも送った。対象献血者が依頼文入手後、3月末までに協力のあった献血者の実態を分析した。

【結果】「もう1回献血」の依頼に応じた献血者は171人（男88・女83）、応諾率16.2%であった。内訳は会社員77人45.0%、大学生19人11.1%、主婦18人10.5%他であった。献血種別は全血献血120人(200mL3・400mL117)、成分献血51人(血漿36・血小板15)で実献血者数は164人だった。その内7人（男4・女3）が期間内に3回目の献血協力があった。

【結語】「もう1回献血」の手紙は、献血応諾率も高く、献血への誘導・契機となったことが示された。今回は固定施設近隣地域での実証実験となつたが、このアプローチを全県に展開してゆくことで、献血者確保への一助となるものと確信した。

P-011**博多駅出張所の成分献血確保について**

福岡県赤十字血液センター

松本正和、吉原由香、糸田知身、板木純子、
森田 豊、塚本良司、釋 澄江、山田敬子、
高尾征義、古賀宗幸、柴田浩孝、松崎浩史

【はじめに】 博多駅出張所は平成23年3月22日、JR博多駅に隣接する博多バスター・ミナル8階に採血ベッド15台、九州最大の献血ルームとしてオープンした。開所時期が東日本大震災直後だったこともあり、初年度は献血者(31,929名)と多くの協力が得られたが、翌年度からは献血者数が減少傾向であった。平成30年度から原料血漿の確保量が増加され、今まで以上に成分献血の確保が求められる状況となり、従来の業務内容を見直して成果が得られたので報告する。**【方法】** 令和元年度は従来から行っていた確保対策に加えて特に1. 全血希望の献血者を成分献血へ採血種別変更、2. 若年層対象のキャンペーンなど推進強化を実施した。令和2年度は3. 固定施設毎に行っていたハガキ、メール要請の作業を福岡C献血予約推進係に業務移管し、依頼要請を担当していた職員が中心となって接遇時にWEB会員(ラブラッド)の勧誘強化を出来るようにした。4. 献血協力団体の送迎先を近隣の献血ルームに割り振ることにより、WEB予約枠を確保して成分献血予約の推進を行った。**【結果】** 平成23年度(総献血者31,929名、成分献血者18,271名)から平成30年度(総献血者26,756名、成分献血者14,889名)と減少していた献血者数が令和元年度(総献血者30,093名、成分献血者17,960名)、令和2年度(総献血者30,597名、成分献血者19,741名)と令和2年度の成分献血者数は平成30年度と比べて4,852名、32.6%の増加となった。また、WEB予約についても平成30年度1,703名、令和元年度3,872名、令和2年度10,062名と増加し、成分献血の予約割合も平成30年度25.1%、令和元年度37.6%、令和2年度71.2%と増加した。**【考察】** 依頼要請の作業を献血予約推進係へ業務移管したことで献血者に接する時間が増え、接遇時等のWEB会員勧誘強化に有用であった。また、WEB予約枠の拡大は新型コロナウイルス感染症防止を踏まえた三密対策と予約献血の推進に寄与した。

P-012**静岡県における献血Webサービス「ラブラッド」登録推進の取り組み**

静岡県赤十字血液センター

園田大志、脇 雅子、世古 梓、田中邦枝、
村上優二、藤村優二、鶴田憲一

【はじめに】 予約率向上のための、新規登録者獲得への静岡県の取り組みを報告する。**【取り組み内容】** 1 新規登録目標数を各施設に設定し、毎日の登録数と進捗状況を回覧し職員の意識強化を図る 2 献血受付・接遇時にすべての非会員へ勧誘を実施、すぐ登録できない場合にも案内を渡し登録を促す 3 献血前後の待合場所にポスター掲示 4 予約会場で予約席の案内を目立つ形で設置し、予約制度をアピール 5 非会員への依頼要請はがきで登録を推進 6 Twitterで前々日までの予約状況を配信 7 商業施設等の献血ポスターで二次元バーコードを掲載し予約可能であることをアピール 8 事業所献血で予約枠を作り、担当者からの登録誘導を依頼する **【結果】** 2020年度県内新規登録者数は13,216(前年度9,917、前年度比133%)であった。県内献血者年代別の会員比率を確認すると20・30・40代が会員登録率が高く(1.04倍・1.09倍・1.11倍)10・50・60代は低い(0.86倍・0.96倍・0.66倍)(2020年度)結果となった。**【考察】** サービスを浸透させるためには多くの人の目に、繰り返し触れることが必要であるので、印刷物・配信物・渉外活動の全てにおいて目立つ形で宣伝する。献血頻度の高い献血者やウェブへの親和性が高い献血者は、宣伝を見た段階で高い割合で登録しているだけである。献血頻度の低い献血者・ウェブに苦手意識を持つ献血者へのアプローチには直接の勧誘が必要で、現場で実際に声掛けする職員の話術が大きく影響する。声掛けによる勧誘にはまず職員個々の意識強化が必要であるが、日々の献血者確保に苦労する職員に大きい負担を課すこととなるため、今後の課題として検討する。

P-013

取り下げ

P-014

献血ルームの情報提供強化は予約率向上と献血者確保に有効である

島根県赤十字血液センター

作野秀輔、小川 陸、庄司寛隆、金森慶太、
上木康裕、松田 清、平田美沙江、
徳田修太郎、松岡 均

【目的】

島根県赤十字血液センターの献血ルームでは 2018 年度 1 稼働献血者数が 25.4 人と満足のいく結果ではなかった。2019 年度に献血者数増加対策のために作業部会を作り、議論の結果、献血経験がある方を対象に、献血ルームへの誘導強化に努めることとなった。

【方法】

2018 年度までは献血ルームでの献血者のみに、ハガキ、e-mail で献血要請をしていたが、2019 年度からは松江市及び近隣市町村在住で移動採血のみの献血者に対して、ハガキ（Web 非会員宛）、e-mail（Web 会員宛）で <1> 献血ルームの所在地の紹介 <2> イベント情報 <3> 献血要請などを通知した。2019 年度はハガキを月に約 1000 人に送付、e-mail は約 800 人に対して月 2 回、2020 年度は対象条件を変更して、ハガキを月に約 2500 人に送付、e-mail は約 1000 人に対して毎週 1 回に増やして送付した。2019 年度は「時間帯によっては混雑する場合がございますので、空き状況の確認・予約を宜しくお願い致します」で案内したが、予約なしで来所する方が多く、受付が混雑するようになった。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、2020 年度には「必ず予約！！」「14:30～16:00 までの予約をお願いします」に変更した。これにより予約率の上昇と混雑の緩和を図った。

【結果】

献血ルームの予約率は【400mL、PC、PPP】それぞれ 2018 年度【14.7%、61.3%、40.2%】2019 年度【21.3%、60.9%、55.9%】2020 年度【56.1%、86.6%、83.6%】と上昇した。1 稼働献血者数も 2018 年度 25.4 人、2019 年度 31.2 人、2020 年度 37.9 人と増加した。予約なしで来所する方も減少し 3 密対策としても有効であった。

【課題】

予約を推奨したことにより、1 稼働献血者数と予約率は向上したが、平日については安定していない。今後さらに成績の向上を目指すため「献血バスで計画よりも集まらなかった会場」「平日の献血協力に対して協力的な事業所」に対して献血ルームへ誘導を図り、一層の安定確保かつ効率化を図りたい。

P-015

公立図書館でのライオンズクラブ協賛献血の運用改善について

長崎県赤十字血液センター

山下隆司、平山敬夫、山口寛也、高尾涼太、
田中文恵、赤司尚子、井福 明、丸山裕史、
糸屋清二、木下郁夫

【はじめに】 今般、2020年3月にライオンズクラブ協賛の献血会場を公立図書館に変更したことでの献血者の駐車場開場前の侵入や図書館開館前の入場といった苦情が発生した。また、合同班2台の採血だが、原料血液搬出の締め作業から入る昼休憩時は1台採血休止となる影響から献血の所要時間が増大傾向にあった。図書館役員、ライオンズクラブとの苦情防止の協議を行い、2021年3月から献血開始30分繰り下げを決定。繰り下げによる献血者集中への懸念から午前の原料血液締めを取り止め、昼休憩は採血職員による交代制とし當時2台採血持続で対応を図った。その結果、所要時間が低減しストレスがなかったとの意見がライオンズクラブや献血者から寄せられた。

【方法】 開館時間厳守のため献血開始を30分繰り下げた。図書館献血過去3回の受付時間ごとの献血者数、採血数、採血終了時間を抽出、献血所要時間低減に向け協議した。2台採血持続を優先する事を目的とし午前便の原料血液搬送取り止めを九州BBCに打診し承諾頂いた。さらに昼休憩を職員間の交代制とした。

【結果】 開館前に入場した献血者はなく図書館側の苦情はなかった。前回の採血所要時間（中央値：分）は、2020/2/18 献 血 (44)、2020/10/9 献 血 (84)、2020/12/3 献血 (52) と 2020/10/9 献血が著しく増大し待合所での待機人数の多さが目立った。この日は指先穿刺導入後間も無かった事、1台のエアコンが不調となり、一時、採血制限した事も要因であった。今回、2台採血持続により順調に献血が流れ 2021/3/4 献血 (47) と献血所要時間は低減した。

【考察】 献血会場を公立図書館へ変更したことにより開館時間等の規則厳守から献血運用で変更が必要となった。一方、コロナ禍の中、検温、消毒、間隔等の安全対策に配慮しつつ献血所要時間も快適に採血に望んで頂く点は重要である。今後とも安心、安全、快適な献血環境作りに配慮して行きたい。

P-016

新型コロナウイルス感染拡大に伴う新しい形の献血についての考察

広島県赤十字血液センター

高田洋輔、藤原 優、真野泰嗣、松本佳子、
佐々木義忠、佐藤万規子、三郎丸悦二、
福原睦則、山本昌弘

【はじめに】

新型コロナウイルスの感染拡大は、血液事業にも大きな影響を与え、様々な業務の変更が求められた。これまでの献血会場では1稼働当たりの献血者を増加させるため、多くの方に来場して頂き、献血会場が密になることが多かった。

そこで、広島県呉市に拠点を置く5つのライオンズクラブ(呉LC・呉グリーンLC・呉ブルーLC・呉うるめLC・呉ポートLC)が完全予約で、密にならない新しい形の献血を実施した。今後この方法が浸透すれば、密を避け、待ち時間もなく、血液を安定的に確保することが可能となる。これまでに二度この方法で献血を行い成果が見られたので報告する。

【方法】

1. ライオンズクラブが5クラブで協力し、会員の関係者等130名を事前に予約
2. 献血バス2台を配備(献血会場: ク莱イトンベイホテル)
3. 予約は15分に7-8名とし、密にならないようライオンズクラブが調整(2021年から予約の空いている時間帯は当日予約可)
4. ライオンズクラブから当センターに時間帯別の予約人数を報告
5. 献血の実施

【結果】

1. 2020年11月6日、献血バス2台、参加者136名、献血者117名
2. 2021年5月25日、献血バス2台、参加者113名、献血者104名(緊急事態宣言下)

【考察】

完全予約で実施することで、待ち時間が無くなり、1人当たりの所要時間が短縮され(30分程度)、密を避けながら、多数の献血者を確保することができた。

またライオンズクラブとしても、クラブ会員の減少で満足な活動が出来ていないクラブが多い中、合同で実施することで大きな成果を出すことができた。さらに、会員の中には中小企業を経営されている方が多いが、中小企業も献血に会社として参加することが可能となった。(会場内に参加企業名を掲示)

課題として、ラブラッドでの予約を検討したが、新規の方が登録不可能な事や予約方法を全員に周知徹底することが困難ということから見送った。今後この課題に取り組んでいく。

P-017

離島献血におけるロジスティックス改善の取組み

日本赤十字社九州ブロック血液センター

溝口昌一、黒田千重美、力丸佳子、市山公紀、
千葉泰之、入田和男

【目的】新型コロナウイルスの感染拡大により、航空便や船舶便の欠航や減便が日常的に行われるようになった。沖縄本島をはじめ、多くの離島献血を抱える九州ブロック血液センターにとって、離島からの献血血液の搬送便に欠航や減便が起きることは、血液の減損に直結しかねない大きなリスクである。そこで、従来からの離島献血におけるロジスティックスを見直し、急に欠航が発生しても柔軟に対応可能な対策を講じて、地域センターと連携し取り組んでいるので報告する。**【方法】**全血採血の血液は、採血時の穿刺から製造工程の分離完了まで24時間以内の時間制限があり、離島から血液が到着するまで平時でも最大12時間以上を要する地理的要因や、離島献血が最低3日から最高6週間連続で実施されることを踏まえ、(1)配車計画時から穿刺時刻が午前9時以降となる献血受付開始時刻とする。(2)献血実施事業所及び管轄市町村担当者にはあらかじめ搬送リスクの説明と献血実施日時の変更が生じた場合には柔軟に対応いただけるよう理解を得ておく。(3)搬送便が欠航した場合の代替便候補を増やしておく。(4)台風等悪天候時には、独自の災害リスクマネジメントを発動し、採血中止判断や製造・検査臨時体制を組む等の事前対策を行う。**【結果】**2020年度の離島発着の航空便の変更は300回以上を数えたが、献血血液の減損は皆無だった。一方、長崎と鹿児島の離島献血20稼働に対して、献血受付開始時刻を変更したことでの採血実施時間は平均30分短縮したが、採血計画達成率は111.5%と効率はむしろ上がった。さらに、搬送リスクを伴う献血の事前回避は、事後の血液確保強化並びに職員の労力軽減につながった。**【考察】**繰り返される新型コロナ感染拡大や年々悪化の規模を増す自然災害など、これまで経験したことのない想定外の事態に備えるために、さらなるロジスティックスの強化に取り組んでいく必要があると考える。

P-018

新型コロナウイルスクラスターによる離島献血への影響について

長崎県赤十字血液センター

平山敬夫

【はじめに】佐世保出張所管内の離島献血は、壱岐島の壱岐市と五島列島の新上五島町、小値賀町で実施。壱岐市は8日間、新上五島町で4日間島内に滞在し、役場や事業所及び商業施設等で巡回献血する。今般、令和3年1月12日からの壱岐市献血が、年末からの新型コロナウイルス感染拡大、医療体制フェーズ4を理由に、年明けの1月4日、壱岐市長から突然、献血受入延期の申し入れが発出され2ヶ月後の延期が決定した。変更後、振替配車先の選定、事業所へ依頼、翌月以降の配車先に入れ替え、長崎センター管内へ配車場所確保の要請など全局的な対応に奔走した。今回、離島献血目前の延期の事態を初めて経験したので離島献血のリスク含め報告する。

【経緯】昨年12月末に市職員9人を含む16人の新型コロナウイルス感染が判明した。市職員は12月下旬に20人規模の飲食を伴う会合に参加していた。壱岐市は、成人式中止、壱岐病院の外来診療制限など発表。これに伴い1月献血の受入延期が申し出された。**【対応】**島内6日稼働12場所で400mL345人献血計画の振替選定に奔走した。2月、3月予定の配車先との入れ替え、市役所等への協力要請、長崎センター管内への配車先支援も相談した。

【結果】1月の振替配車について、県内8日稼働11場所400mL345人で計画、実績314人採血で計画比91%であった。1月14日以降、壱岐市における新たな感染者は確認されず、3月に壱岐市への再配車を実施。7日稼働12場所計画、実績336人採血で計画比97%であった。**【考察】**離島献血のリスクは、従来台風や大雨といった悪天候による原料血液搬送手段であるフェリーや航空機の欠航が主であった。しかし、今般、新型コロナウイルス感染に伴う実施目前の延期を経験し新たなリスクと認識し、今後も再感染拡大やワクチン接種による献血制限もリスクに加わる。実施の際は動向注視と細心の注意が重要である。

P-019

コロナ禍において移動採血 1 稼働人数が上昇した背景について

長野県赤十字血液センター事業部献血推進課

中島健太郎、滝澤正見、内村辰徳、百瀬克彦、
堀内忠美、小池敏幸、村上純子

【はじめに】令和2年度長野県内の移動採血施設においては、コロナウイルス感染拡大の影響で大きな打撃を受け、多くの移動採血中止・延期が発生した。この状況でも移動採血の1稼働人数対前年度比は107.3%を記録し、過去5年間において最高数値であった。400mL献血率(99.9%)と献血協力者数を維持したまま1稼働人数が上昇した要因を解析したので報告する。

【方法】1) 令和2年度の域別、年代別、職業別毎の構成比を算出した。2) 前年度との変動が見られた項目について取り組んだ内容を検証した。3) 報道発信、はがき・メール発送、計画変更の状況等を前年度と比較し特出している点を検証した。

【結果】1) 年代別、職業別構成比はそれぞれ大きな変動は見られなかったが域別構成比については、職域、学域が減少し、地域、街頭が増加した。特に街頭は令和元年度の14.3%から令和2年度は21.6%と大幅に増加した。街頭会場は主に食料品を扱う店舗に多く配車し1稼働人数は平均56.3人を記録した。2) 一般受入可能会場が増えたことで、はがき・メールによる依頼も増加した中で、依頼方法についても工夫を凝らし令和2年度は前年度比125.7%の70,232通を発送した。3) 1稼働人数は、前年度と比べ地域が2.7人、街頭が5.1人の増加となった。

【考察】「献血は不要不急にはあたらない」とするにとどめず、街頭会場全体の約95%を占めた食料品(生活必需品)を扱う店舗へ街頭献血を展開したことが、「献血は必要不可欠」という意識を醸成し献血者確保に繋がった。今後も職域においては、テレワークの推進により献血者確保が厳しくなることが予想される。このような状況において、地域、街頭での献血者確保が見込まれる会場を精査するとともにメディア、SNS及びはがき・メール等を活用し一般協力者を献血に結び付けることが重要であると考える。

P-020

献血会場への高校クラブ生の誘導

和歌山県赤十字血液センター

田中淳史、木村太祐、長岡 徹、逢坂泰弘、
岡澤一将、西山和人、中出佳秀、古川晃義、
城本 剛、石上雅一、住友伸一

【はじめに】令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、献血協力団体の職場献血辞退が相次ぎ、街頭献血に頼らざるを得なかった。街頭献血は、天候に左右されやすく、特に集客の見込めない平日は、安定供給に支障を来す恐れがあった。また、和歌山センターは長年、若年層献血者の確保に積極的に取り組んでおり、10代献血者率は平成30年6.6%、令和元年7.9%と全国的にも高値で推移している。主な要因のひとつは高校献血の高い実施率にあったが、当年度における高校献血の実施は、前年度32校の実績に対し、22校が辞退となり、若年層献血者の確保に苦慮した。今回、若年層献血者の確保対策として高校クラブ単位による献血協力に取り組んだので報告する。**【方法】**令和2年4月から令和3年3月までの間に、高校献血の窓口となる学校担当者等を通じて、クラブ監督を紹介いただき、近隣の献血会場にてクラブ単位での献血協力を依頼した。実施時期については、各クラブと調整のうえ、クラブ活動の休みの日・大会後・対外試合禁止期間等の平日とし、実施会場については、コロナ禍のため、学校近隣のスーパーやホームセンター(街頭)とした。**【結果】**9校15クラブより12会場(8.4稼働)にてクラブ生305人の協力が得られ、1会場あたりの参加は25.4人、一般も含めた全体の献血実績は1稼働平均57.6人であった。**【考察】**高校のクラブ単位による献血協力により、若年層献血者の確保に加え、街頭献血での稼働効率向上に繋がった。また、学校と調整する中で、クラブ監督の献血への理解がより深まることで、クラブ監督同士の呼び掛けによる協力クラブ数の増加も見られた。このことからも、コロナ禍による高校献血実施が抑制される状況下において、更なる当年代の献血者確保及び稼働効率の向上に期待できるものと考える。

P-021

献血カード貼付シールを活用した血色素量不足ドナーへの対応

京都府赤十字血液センター

橋井友理子、森 直樹、杉江琢史、
浜崎裕美子、菅沼誠人、辻 肇

P-022

シニア世代の再リクルート作戦：献血中断中の 60 歳～ 64 歳への献血勧奨

山梨県赤十字血液センター

白川雄也、秋山進也、三枝悠人、芦澤亮斗、
名執裕哉、増田達弥、植松 久、丹沢隆介、
川手華与、中村 弘、杉田完爾

【はじめに】 移動採血現場（特に街頭取組）において血色素量不足のため不適となった献血者が、短期間に繰り返し来場され不適となることがある。献血者において、次回来場時期の目安が不明確なことが原因と考えられた。**【方法】** 採血前検査で血色素量不足で不適になった献血者に対し、栄養指導を行うとともに次回来場時期の目安を説明した。すなわち、女性：血色素量 11.4 以下および 11.5 ~ 11.9g/dL の不適者の次回来場時期の目安をそれぞれ半年および 3 カ月後とした（ただし、女性 12.0g/dL 以上での不適および男性については対象外とした）。さらに、献血者が見て直ぐに分かるように、繰り返し貼ってはがすことができる縦 40mm × 横 50mm シール（献血カードの縦半分の大きさ）を作成し「今日の血色素量」、「次回献血日」等が記入できるようにした。実際の運用は以下のように行った。（1）シールに次回献血日を採血前検査担当看護師が記入。（2）会場 IC カードにシールを貼付し、受付担当者に引き継ぐ。（3）不適処理を行った後の献血カードにシールを貼付して再度献血者に次回献血日の案内をして献血カードを返却する。**【まとめ】** 一定値以下の血色素量不足の献血者に間隔を空けてもらう目安をお知らせすることができ、また他の献血者の待ち時間の短縮、職員の作業の削減等、全体の作業効率を上げることができた。

【緒言】 献血可能年齢の上限は 69 歳であるが、65 歳以上は 60 ~ 64 歳に献血を行われた方々に限定されている。しかし、この『ただし書き』は十分に周知されていないために、60 歳以降に献血未実施の 65 歳以上の献血希望者がしばしば来場される。献血中断中の 60 ~ 64 歳へ献血勧奨のハガキを送り、シニア世代の再リクルートを試みたので報告する。**【方法】** 2020 年 3 月に、「60 歳未満に献血実績があるが、60 ~ 64 歳に献血未実施の方々に 65 歳未満の献血を勧奨するハガキ」を、山梨県で献血実績のある 60 ~ 64 歳（3,528 名）の中から 60 歳以降に献血未実施の 1,792 名に送付し、1,715 名に配達された。4 月以降、献血者コードを毎月照会し、応諾（応諾日、応諾回数、献血種類）を確認した。**【結果】** 1. 2020 年 4 月～ 2021 年 3 月までの 1 年間の応諾者数は 119 名で、応諾率は 6.9 % であった。延べ応諾回数は 164 回（平均 1.4 回 / 人）で、複数回は 27 名（応諾者の 22.7 %）であった。全血献血が 84.8% (400mL 率 95.7%)、移動バス献血が 95.7%。2. 最終献血日から応諾献血日までの間隔は、高年齢になるにつれて長期化している傾向があり（5 年以上の間隔が最多の 25.2%）、定年前の職域献血が最終献血で、その後は中断された場合が多いと考えられた。**【考察】** 山梨県における 2020 年度の 60 ~ 64 歳の延べ献血回数は 2,957 回で、延べ応諾回数 164 回は 5.5 % に相当し、関東甲信越ブロック内で実行できれば、約 7,500 回 / 年に相当する。久しぶりの献血が契機となり、複数回・頻回献血ドナーとして復活された方々が存在することも明らかになり、シニア世代をターゲットとした新規献血者のリクルートは非常に有益な改善活動であると考えられる。一方、献血中断を抑制するために、60 歳直前の献血者に年齢の基準を強く周知する必要がある。

P-023

**献血推進企画「いのちのバスプロジェクト」
～ Best to cool KENKETSU ! 献血かっこいい！～**

大阪府赤十字血液センター

國和昌浩、玉川裕基、村上竜政、
恵比須有実子、田中陽子、川口広志、
池田 超、田中英樹、吉村 誠、駒田 修、
谷 慶彦

【はじめに】 献血を取り巻く環境として、献血可能人口が減少しており、初回献血者の募集を視野に入れた新たな献血者確保への取り組みが重要となっている。今回、大阪府赤十字血液センターでは在阪スポーツチームと連携し、チームの発信力や影響力を献血の普及啓発に繋げた事例を報告する。

【実施方法】 2017年から続く活動を2019年には「いのちのバスプロジェクト」として実行した。在阪スポーツチームと連携を図り、その趣旨に賛同いただいたガンバ大阪、セレッソ大阪、大阪エヴェッサ、NTTドコモレッドハリケーンズの試合会場や街頭献血会場にて移動採血車を配車、また選手を起用した献血啓発ポスターを作製して献血推進を行った。

【結果】 これまでの配車実績では32稼働配車、47.6人／1稼働、初回献血者率15.8%である。ガンバ大阪では2稼働、61.0人／1稼働、初回献血者率18.0%、セレッソ大阪では19稼働、43.1人／1稼働、初回献血者率13.9%、大阪エヴェッサでは2稼働、31.0人／1稼働、初回献血者率25.8%、NTTドコモレッドハリケーンズでは9稼働、57.7人／1稼働、初回献血者率16.6%であった。(令和2年度街頭配車実績：38.0人／1稼働、初回献血者率10.9%) 献血啓発ポスターは4チームで14種類30,000枚を無償で提供いただき、啓発資材として多くの方に共感を得る結果となった。また、令和3年度からNTTドコモレッドハリケーンズの選手に献血アンバサダーを委嘱し、献血啓発活動を行うこととなった。

【考察】 プロ選手の起用は高額な費用や肖像権が発生するが、本プロジェクトへの賛同によって無償で選手の起用が可能となり、効果的な献血推進活動に繋がったと考える。また有名選手の起用により、献血に関心がない方へも発信することができ、当センターだけでは啓発できない方々に広く献血啓発することができたと考える。この取組みは初回献血者率が高いことから、実施回数を増やし初回献血者獲得に努めていきたい。

P-024

トミカ「献血バスミニカー」プレゼントキャンペーん～中高年の献血者確保対策決定版～

岡山県赤十字血液センター

中村清香

【目的】 複数回献血の推進及び、移動採血と固定施設での400mL献血・成分献血の確保目標達成 **【方法】** 岡山県内の献血会場で、応募期間中希望者を対象に応募ハガキを配布。期間中2回(400mL・成分献血)献血をした方は、応募ハガキにご自身の郵便番号・住所・氏名を記入いただき職員へ渡してもらう。実施期間は、第1期は献血2回実施期間を令和元年9月1日～3か月間、応募期間を9月1日～3か月間とし、第2期は献血2回実施期間を令和元年9月1日～6か月間、応募期間を12月1日～3か月間とした。これにより400mL献血者でも1度は確実に応募できる期間をもうけた。周知方法は、ラプラッド会員への配信、ポップ作成、職員の声掛け、ホームページ掲載、プレスリリースでのマスコミ周知。当選発表は当選ハガキの発送により発表とし、引換期間内に当選ハガキを持参のうえ岡山県内献血ルームへ取りに来ていただき、さらに献血の協力を求めた。**【結果】** 期間中2回献血をすることにより何度も応募ができるため、献血回数が増えた方や、成分献血を今まで以上に積極的に協力してくださった方も見受けられた。抽選を2期に分けたことにより1期で当選した人が、もう一つ欲しくなるような効果があり、第1期の応募者数は1,529人に対し、第2期は2,693と大幅に増加した。応募率は、男性約80%、女性約20%となり、ミニカーが男性に人気なことがうかがえる。当選者1,000名の献血回数を前年同期と比較すると143%に増加している。さらに令和2年度も実施をした結果応募総数が8,000通を超え献血增加につながった。**【考察】** 固定施設では積極的な声掛けができたが、移動採血では希望する方のみハガキ配布となつたため応募数は低かったが、令和2年度はその反省をふまえ改善した結果移動採血でのイベント参加は飛躍的に増加した。さらに令和3年度では新たな試みを実施し安定的な血液の確保ができるようにドナーコントロールを行う予定。

P-025

青少年赤十字高校生メンバーの力で献血を盛り上げよう～青少年赤十字は、気づき、考え、実行する～

宮崎県赤十字血液センター¹⁾、
宮崎県立高鍋高校青少年赤十字部²⁾
松浦武志¹⁾、元日田勉¹⁾、高橋賢司¹⁾、
清田 雅¹⁾、押川秀次¹⁾、大西公人¹⁾、
北折健次郎¹⁾、高鍋高校青少年赤十字部²⁾

P-026

400mL 全血献血可能な初回献血者の再来にかかる影響の検討

日本赤十字社血液事業本部中央血液研究所¹⁾、
日本赤十字社血液事業本部²⁾、大東文化大学³⁾、
日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター⁴⁾
小田嶋剛¹⁾、高梨美乃子²⁾、杉森裕樹³⁾、
佐藤潤一²⁾、鹿野千治²⁾、松田由浩²⁾、
小島牧子¹⁾、津野寛和⁴⁾、室井一男⁴⁾

【はじめに】 将来の献血を支えていただく若年層、とりわけ献血対象年齢の高校生に対する献血に触れ合う機会の提供の取り組みについては、以前から各高校を個別訪問して移動献血車の配車や献血ルームへの献血案内、献血セミナー開催の働きかけ等を行っているが、献血者の増加とセミナー開催の増加までには至っていないのが現状である。そのような中、青少年赤十字に加盟する高校の献血推進活動の取り組みが顕著なので紹介する。

【令和2年度の取り組み】 宮崎県立高鍋高校青少年赤十字部を対象にした1：献血セミナーの実施（学期ごとに開催、合計3回）、献血セミナー実施後は、2：献血ルームでの献血と献血呼び掛けの実施、3：献血ルーム献血者対象の献血動機等アンケートの実施、4：文化祭での部活動紹介（アンケート報告）、5：アンケートの献血ルーム掲示、アンケートを見た地元紙記者による6：地元紙コラムでの紹介まで繋がっていった。

【令和3年度の取り組み】 令和3年度においても、1：献血セミナーの開催（学期ごと）、2：受血者患者家族によるセミナー（青少年赤十字部、学校全体）、3：献血参加、4：献血ルームや移動献血車での献血呼び掛け、5：献血者対象のアンケートの実施などを企画している。血液センターとしては、青少年赤十字は「気づき、考え、実行する」の態度目標のもとに活動していることから、同校青少年赤十字部が引き続き自主的に活動できるようにサポートしながら、高校生の献血参加が拡がる活動を協同で展開することとする。

【緒言】 以前、本学会にて、若年層（男24歳未満、女23歳未満）、高体重（男65kg以上、女53kg以上）、200mL全血（200WB）献血が初回献血者の再来要因として重要であり、特に学生の場合、初回200WB献血による献血経験が肝要であることを報告した。今回、400mL全血（400WB）献血基準を満たす初回献血者に限定して再来要因を追加検討した。

【目的】 400WB献血可能な初回献血者の再来に影響を及ぼす要因を検討する。方法：2014年の1年間の初回献血者のうち、400WB献血基準を満たす者に限定し、およそ2年後の2016年12月29日までの再来の有無、年齢、体重、血色素量（Hb）、採血施設（固定・移動）などのデータを血液情報システムより抽出し、再来の有無に影響を及ぼす要因について統計学的解析をした。

【結果】 400WB献血の条件（年齢、体重、Hb）を満たした391,131人（再来；有137,154、無253,977）を解析した。全体の単変量解析では男性、26歳未満、体重63kg以上、400献血、固定施設で再来割合が高く、再来と有意に関連する要因であった。サブグループ解析で、男性では25歳未満、体重66kg以上、Hb15.4未満、400WB、固定施設が再来と有意に関連し、多変量解析のオッズ比（OR）は全て有意であったが、400WBのOR（1.223）が最も高かった。女性の場合、26歳未満、体重56kg以上、Hb13.5以上、400WB、固定施設が有意な要因であり、多変量解析でも全て有意であったが、固定施設のOR（1.358）が最も高かった。

【考察】 男女ともに若年齢、高体重は以前の検討と同様であった。本解析により400WB献血及び固定施設が再来と関連する重要な要因であることが示唆された。すなわち、400WB献血可能な献血者であれば、200WB献血にこだわることなく、初回から400WB献血でも再来につながることが示された。また固定施設も良好な経験になっていると考えられた。